

SCMとIT経営・実践研究会 ビジネスモデル分科会

**「塩野七生：ローマ人の物語」
に学ぶ**

2007年8月25日

武藤 猛

塩野七生：ローマ人の物語

興隆期

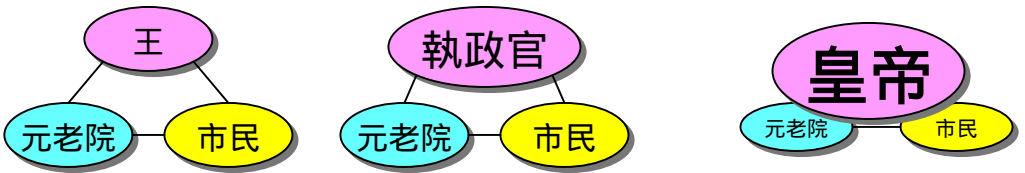
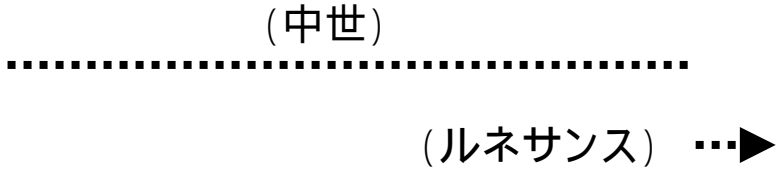
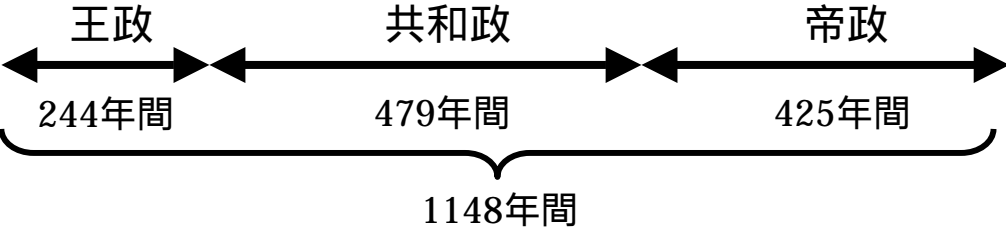
最盛期

衰亡期

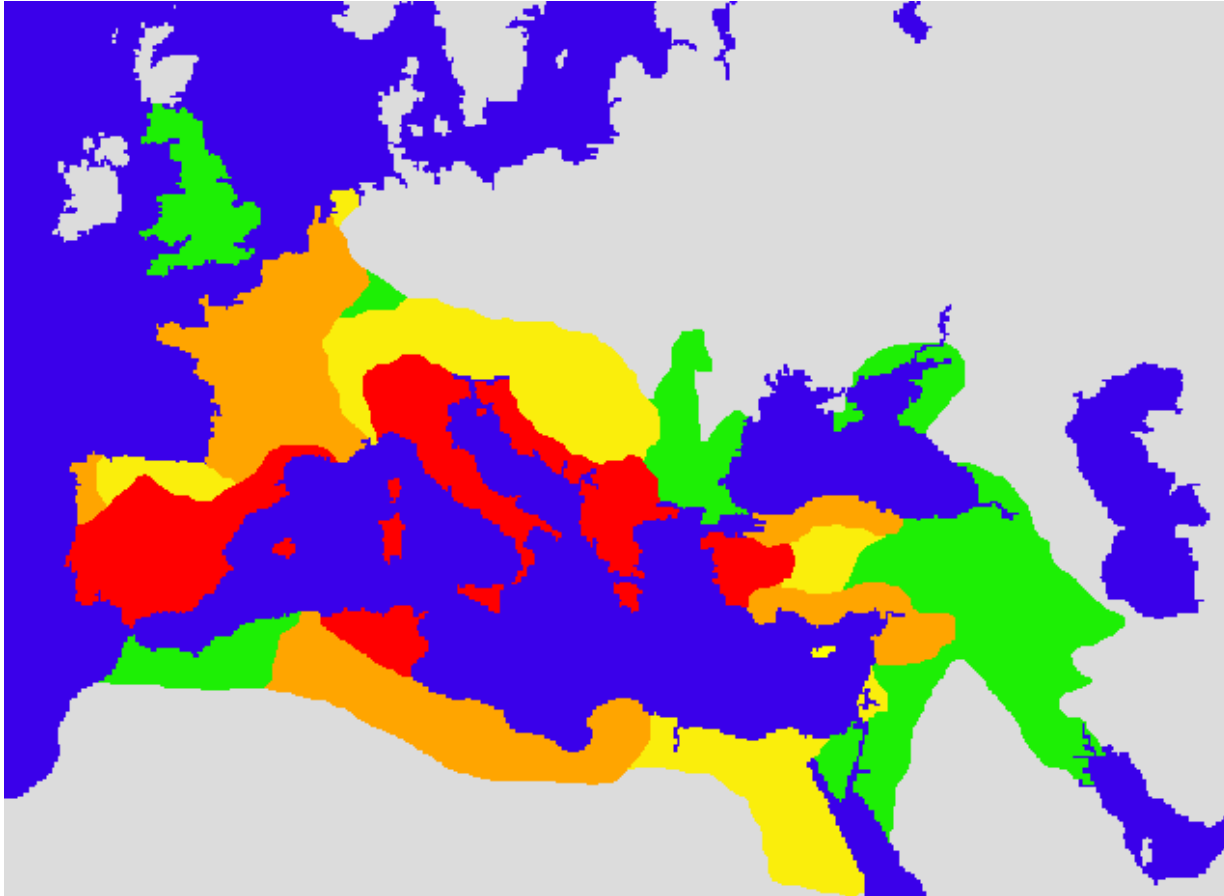
- | | | | |
|---------|----|----------------------------|---------|
| ローマ人の物語 | 1 | ローマは一日にして成らず / 塩野 七生 / 新潮社 | 1992.7 |
| ローマ人の物語 | 2 | ハンニバル戦記 / 塩野 七生 / 新潮社 | 1993.8 |
| ローマ人の物語 | 3 | 勝者の混迷 / 塩野 七生 / 新潮社 | 1994.8 |
| ローマ人の物語 | 4 | ユリウス・カエサル / 塩野 七生 / 新潮社 | 1995.9 |
| ローマ人の物語 | 5 | ユリウス・カエサル / 塩野 七生 / 新潮社 | 1996.3 |
| ローマ人の物語 | 6 | パクス・ロマーナ / 塩野 七生 / 新潮社 | 1997.7 |
| ローマ人の物語 | 7 | 悪名高き皇帝たち / 塩野 七生 / 新潮社 | 1998.9 |
| ローマ人の物語 | 8 | 危機と克服 / 塩野 七生 / 新潮社 | 1999.9 |
| ローマ人の物語 | 9 | 賢帝の世紀 / 塩野 七生 / 新潮社 | 2000.9 |
| ローマ人の物語 | 10 | すべての道はローマに通ず / 塩野 七生 / 新潮社 | 2001.12 |
| ローマ人の物語 | 11 | 終わりの始まり / 塩野 七生 / 新潮社 | 2002.12 |
| ローマ人の物語 | 12 | 迷走する帝国 / 塩野 七生 / 新潮社 | 2003.12 |
| ローマ人の物語 | 13 | 最後の努力 / 塩野 七生 / 新潮社 | 2004.12 |
| ローマ人の物語 | 14 | キリストの勝利 / 塩野 七生 / 新潮社 | 2005.12 |
| ローマ人の物語 | 15 | ローマ世界の終焉 / 塩野 七生 / 新潮社 | 2006.12 |

ローマ帝国の歴史

BC 8世紀	BC 7世紀	BC 6世紀	BC 5世紀	BC 4世紀	BC 3世紀	BC 2世紀	BC 1世紀	AD 1世紀	AD 2世紀	AD 3世紀	AD 4世紀	AD 5世紀	AD 6世紀	AD 7世紀	AD 8世紀	AD 9世紀	AD 10世紀	AD 11世紀	AD 12世紀	AD 13世紀		
BC753 初代 ローマ 王ロム スが ローマ を建国		BC509 王政廃 止 共和制 始まる			BC264 第一次 ポエニ 戦役		BC44 カエサ ル暗殺 される BC30 オクタ ヴィア ヌス 最高権 力者に (帝政 始まる)					311 コンス タンチ ヌス1 世(大 帝)キリ スト教 寛容令 395 テオド シウス 大帝死 去、 ローマ 帝国 東西に 分立	476 西ロー マ帝国 滅亡									1204 東ロー マ帝国 滅亡



ローマ帝国の版図



ローマ帝国版図の拡大: 紀元前133年(赤)、紀元前44年(橙色)、14年(黄)、117年(緑)

ローマ人の歴史から学ぶ

知力ではギリシア人に劣り、体力ではケルトやゲルマンの人々に劣り、技術力ではエトルリア人に劣り、経済力ではカルタゴ人に劣るのが自分たちローマ人であると自らが認めていた；それなのに、ローマ人だけが一大文明圏を築きあげ、それを長期間に渡って維持できたのか。

(第1巻p.8)

古代のローマ人が後世の人々に残した真の遺産とは、広大な帝国でもなく、2000年経ってもまだ立っている遺跡でもなく、宗教が異なろうと人種や肌の色が違おうと同化してしまった、彼らの開放性ではなかったか。

(第1巻p.270)

ローマ人の歴史から学ぶ

天才とは、その人だけに見える新事実を、見ることのできる人ではない。
誰もが見ていながらも重要性に気づかなかった旧事実に、気づく人のこと
である。 (第2巻p.173)

ハンニバルがアレクサンダー大王から学び、スキピオがハンニバルから学んだこと: 圧倒的な敵に打ち勝つ秘訣は、敵の主戦力を非主戦力化すること
である。 (第2巻p.255)

優れたリーダーとは、優秀な才能によって人々を率いていくだけの人間ではない。率いられた人々に、自分たちがいなくては、と思わせることに成功した人でもある。持続する人間関係は、必ず相互関係である。一方的関係では、持続は望めない。

- 第二次ポエニ戦役の主演、ハンニバルとスキピオの人間論に触れて
(第2巻p.286)

ローマ人の歴史から学ぶ

「人間ならば誰にでも、現実のすべてが見えるわけではない。多くの人は、現実しか見ない」(ユリウス・カエサルの言葉より)。

(第5巻)

「一人が統治する国家の形体は、あの時期のローマにとっては、政治上の必要になっていた」

「アウグストゥスは、アレクサンダー大王やカエサルのような、圧倒的な知力の持主ではなかった。しかし、あの時期の世界は、彼のような人物こそを必要としていたのである」(ローマ史研究家 E . F . エドゥコック)

(第6巻p.337)

ローマ人の歴史から学ぶ

被統治者が統治者に求めるのは、正当性、権威、および力量という三条件である。
(第8巻p.18)

ローマ人は、兵站で勝つ；あるいは、ローマ人は、つるはしで勝つ。
(第9巻p.34)

兵站(ロジスティクス)という確定要素をおろそかにしないではじめて、精神力という非確定要素の完全な発揮も望める。
(第9巻p.62)

ローマ人は、思わぬ幸運に恵まれて成功するよりも、状況の厳密な調査をしたうえでの失敗のほうを良しとする。ローマ人は、計画なしの成功は調査の重要性を忘れさせる危険があるが、調査を完璧にしたうえでの失敗は、再び失敗をくり返さないための有効な訓練になると考えているのである。
(第9巻p.307)

ローマ人の歴史から学ぶ

「ローマは、すべての人に門戸を開放した。それゆえに異人種・異民族・異文化が混ざり合っ動くローマ世界は、そこに住む全員が、各々の分野での労働にいそしむ社会をつくりあげたのである。(中略) ローマは、誰にでも通ずる法律を与えることで、人種や民族を別にし文化を共有しなくても、法を中心にしての共存共栄は可能であることを示した」(ギリシア人学者のアエリウス・アリスティデイスが元老院で行った演説より)

(第9巻p.386)

人間にとっての最重要事は、安全と食の保証であるが、「食」の保証は「安全」が保証されてこそ実現する。したがって、「平和」が最上の価値である。

(第9巻p.390)

ローマ人の歴史から学ぶ

ローマ人は、…現代人から、「**インフラの父**」と呼ばれている民族である。

…ローマ人の考えていたインフラとは、

- **ハードなインフラ**: 街道、橋、水道、港、神殿、公会堂、広場、劇場、円形闘技場、競技場、公共浴場
- **ソフトなインフラ**: 安全保障、治安、税制、医療、教育、郵便、通貨

(第10巻p.16)

(五賢帝の最後を飾るマルクス・アウレリウスをもって)死ねば誰でも同じだが、死ぬまでは同じではない、という矜持をもってローマを背負った、リーダーたちの時代は終わったのである。

この後にも、この種の矜持を自らの生き方の支柱にする人は、個々別々には出てくる。だが、彼らが主導権をふるえた時代というならば、確実に終わったのである。…

魚は頭から腐る、と言われるが、ローマ帝国も「頭」から先に腐っていくのだ。

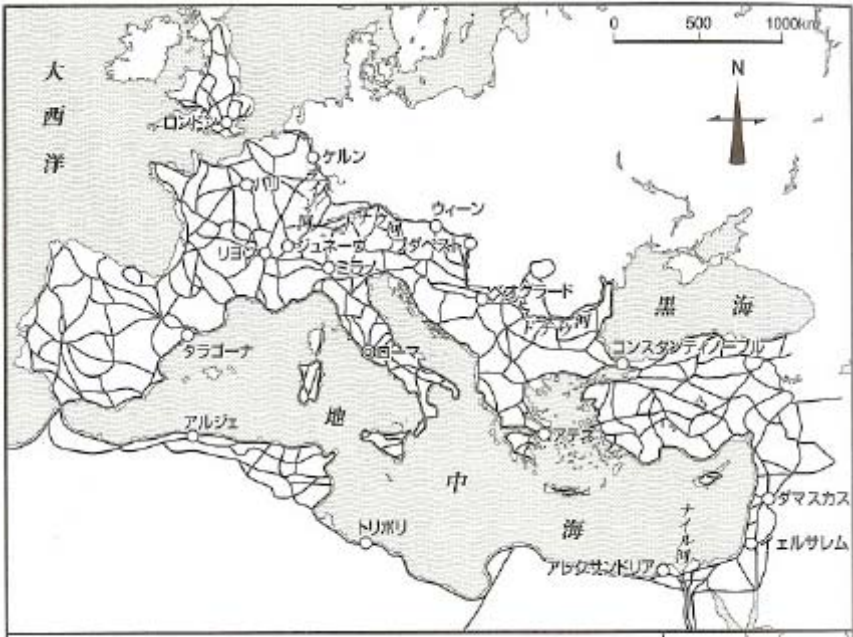
(第11巻p.380)

ローマ人の歴史から学ぶ

ローマ帝国にとって、3世紀の危機は、指導者層の質の劣化、蛮族の侵入の激化、経済力の衰退、知識人階級の知力の減退、キリスト教の台頭などが要因と考えられる。とりわけ、政局が不安定になり(皇帝が謀殺・虐殺等で次々に交替し)、**国家戦略の継続性が失われた**ことが大きい。

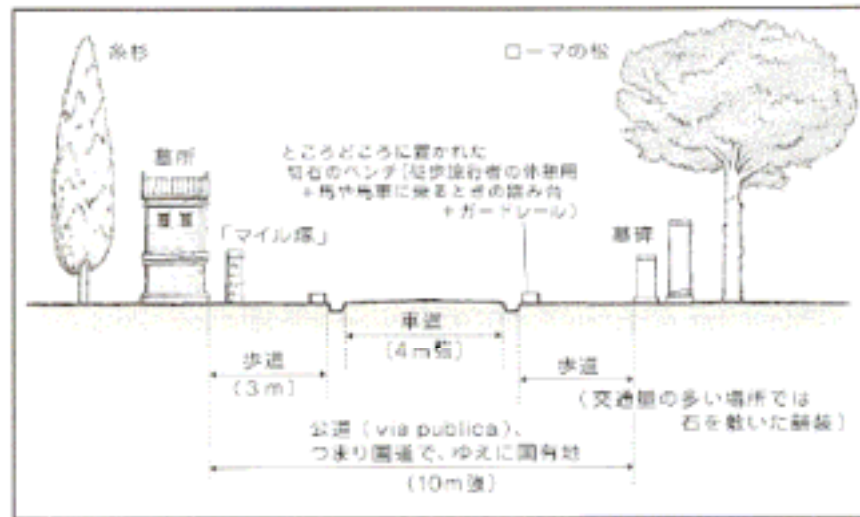
(第12巻p.7)

ローマ帝国のインフラ : 街道網(万里の長城との比較)



帝政期のローマ街道網(上)と、各時代の中国における万里の長城(下) : 同縮尺

ローマ帝国のインフラ : ローマ街道の構造



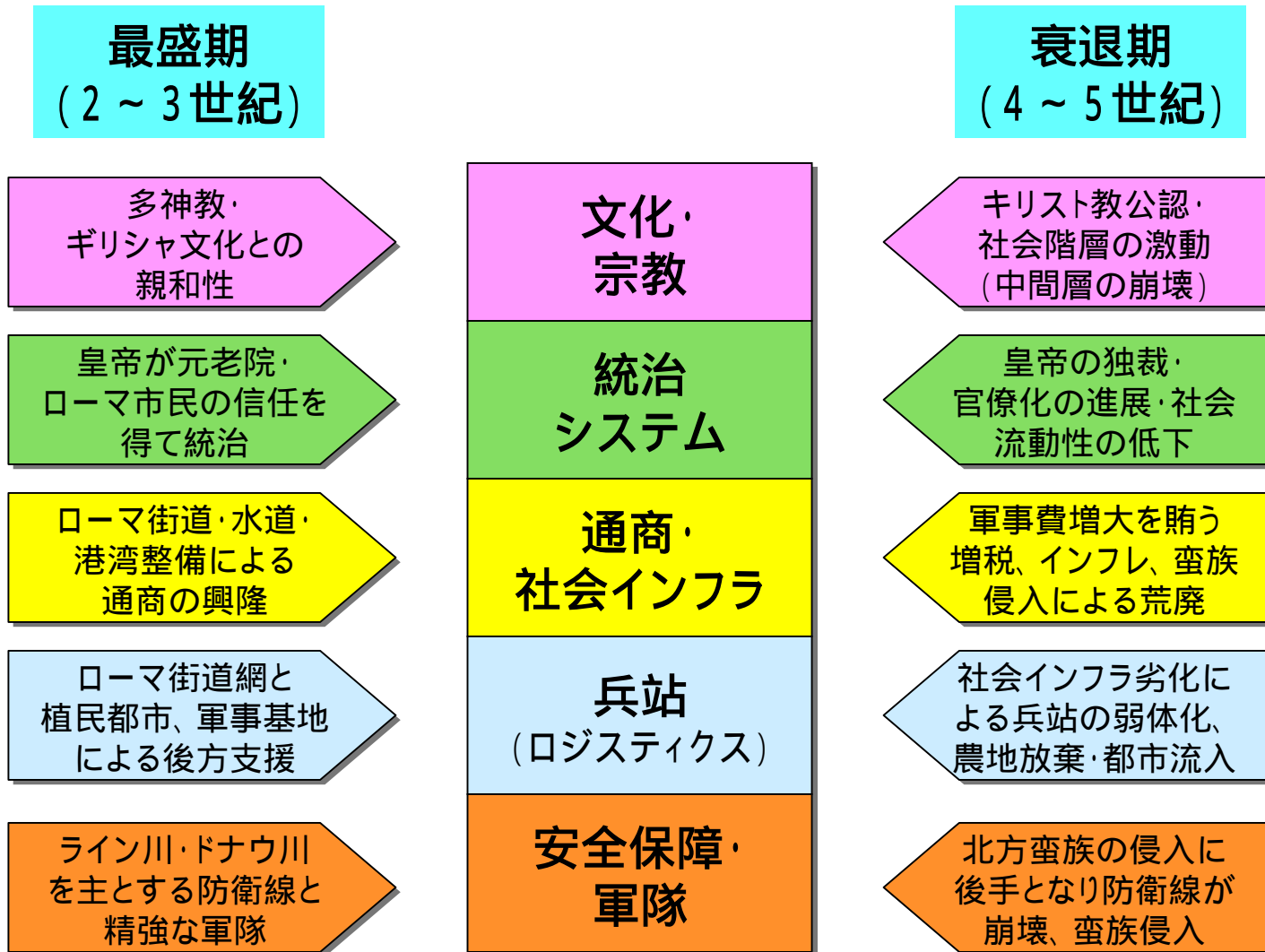
ローマ街道断面図

ローマ帝国のインフラ : 水道・水道橋



ポン・デュ・ガール(フランス)

ローマ帝国の隆盛と興亡: その要因



歴史から何を学ぶか

格差社会について: 格差は昔からあった。しかし、問題は「敗者復活システム」が機能しているかどうかである。日本の問題は、格差に脅えることよりも、格差が固定することへの不安によるのではないか。

教育について: 教育に関する問題の根源には、親世代の問題がある。子供の自主性や個性を慎重するよりも、迷っても良いから経験させることが重要である。

エリートについて: 日本に活力が失われたことの原因に、エリート層の自信喪失、「ノーブリス・オブリージュ」の精神の希薄さにある。

リーダーシップについて: ローマ史における最大のリーダーであるカエサルの哲学は、「すべての人材は活用出来る」「部下が喜んで苦勞するようにもっていく才能」の2点である。

[注] 塩野七生: 日本と日本人への10の質問、文藝春秋(2007年7月)